
バリアフリー教育開発研究センター運営委員の紹介

■野崎大地（のざき だいち）

バリアフリー教育開発研究センター 副センター長

【所属】

身体教育学コース・教授

【専門分野】

身体教育科学

【センターとの関わり】

2011年度から運営委員として参加し、2016・2017年度にはセンター長も務めました。私自身の関心は、脳神経系によるヒトの身体動作の制御・学習プロセスにあります。研究の対象としては、スポーツや楽器演奏など、ヒトならではの洗練された動作はもちろんですが、身体障害からの機能回復も含まれます。心理的、社会的、文化的なバリアなど多様なバリアを扱う本センターの活動にも影響されながら、身体機能のバリアの問題に取り組んでいきたいと思っています。

■勝野正章（かつの まさあき）

【所属】

学校開発政策コース・教授

【専門分野】

学校経営学、教育政策研究

【センターとの関わり】

2018・19年度は東京大学教育学部附属中等教育学校の校長を務めています。附属学校でも生徒が教科や総合的な学習の時間（「探求的市民科」）などでバリアフリーやインクルージョンについて学ぶ機会が徐々に増えていますが、もっと増やしていきたいと思っています。同時に、それらは現実的な対応が求められている学校運営の課題でもあります。教職員も学んでいます。19年3月の校内研修会では、星加良司先生から合理的配慮について講義していただき、当事者の方からLGBTについて学びました。勝亦あき子教諭がバリアフリー教育開発研究センター研究員としてセンターと学校をつな

ぐとともに、生徒と教職員の学びの機会のさらなる充実に尽力してくれています。私自身も、学校をインクルーシブな学びと生活の場にしていくための政策や制度について、もっと学んでいこうと思っています。

■ 下山晴彦（しもやま はるひこ）

【所属】

臨床心理学コース・教授

【専門分野】

発達臨床心理学、臨床心理学カリキュラム開発、認知行動療法

【センターとの関わり】

センター開設に関わったご縁で、センターがスタートした 2009 年度から運営委員を務め、2010～2011 年度は副センター長、2012～2015 年度はセンター長を務めました。センター長であった時期は、私の専門である発達臨床心理学と関連して発達障害の支援についての研究やシンポジウムを主要なテーマとしてセンターの活動を展開しました。2016～2017 年は、後任の野崎センター長の補佐として副センター長を務めました。

私の最初の就職は、本学の学生相談所の相談員でした。その後に東京工業大学の保健センターで心理相談の専門職として勤務しました。また、このような大学での学生相談業務と並行し、精神科クリニックにおいて精神障害の患者様の問題解決支援を兼業として行ってきました。このような経験を通して心理的問題や精神障害は、単に個人の心理・精神の弱さに原因があるのではなく、社会的ストレス等の環境要因に強く影響されるものであることを認識しておりました。しかも、心理不調や精神障害が生じて、多くの人は、心理相談や精神医療にかかることを避けがちであり、それが問題の深刻化の要因となっていることも認識しておりました。重症化してからご家族等の関係者に促されて来談し、対応が手遅れとなるといった事態にしばしば遭遇しました。問題が顕在化しにくい発達障害の場合には、さらにその傾向が強くなります。相談や治療が開始されたときには、既に問題が複雑化や慢性化していることが多くなります。

このような現象が起きるのは、心理的問題や精神障害、発達障害に関する社会的偏見（スティグマ）があり、それがバリアとなって来談を遅らせていると見ることができます。バリアフリーといった場合、通常は、活動の妨げになる物理的なバリアを指すのですが、このような社会的偏見は、心理社会的なバリアと呼ぶことができます。心理社会的なバリアは、見えにくいだけに見逃されがちです。私は、臨床心理学的観点から、このような心理社会的バリアを解消

する方法を研究し、開発しております。

■能智正博（のうち まさひろ）

【所属】

臨床心理学コース・教授

【専門分野】

臨床心理学、研究方法論

【センターとの関わり】

臨床心理学のなかでも特に、コミュニティのなかにおいて障害をもっている方々をどう支援していくかに関心があります。研究では、障害をもっている方におけるライフストーリーや語り（ナラティブ）について質的な探究を行っています。特に人生途中で脳に損傷を負い、失語症などの高次脳機能障害をもたれた方がどのように自分を立て直し再構築していくか、あるいは語り直していくかが私の研究における重要なテーマです。語りは既にわかっていることを言葉にするだけのものではなく、それによって意味を生みだし、当人にとっての「現実」を創りあげます。バリアに関する語りも例外ではないでしょう。このセンターの運営に関わらせていただきながら、個人の体験する「バリア」についてもう一度考え直し、ひとりひとりの人生の文脈のもとで何が「バリア」となり、どういう実践がそれを変化させていくのか、自分なりに考え直していければと思っています。よろしくお願いします。

■東郷史治（とうごう ふみはる）

【所属】

身体教育学コース・准教授

【専門分野】

教育生理学、応用健康科学

【センターとの関わり】

今年度でセンター運営委員に着任して6年目となります。現在、身体教育学コースに所属し、環境や社会の変化にともない生じる心身問題と、その対応について調査・検討をしているという点で、センターとのつながりがあると考えています。また、センターの誕生に中心的に関わられた武藤芳照名誉教授と衛藤隆名誉教授には、学生時代に、医療、福祉、健康教育の課題としての多様なバリアの存在について学ぶ機会を頂いたということは、私のセンターとの関わりの原点となっていると思われれます。専門分野では、思春期の

子ども、勤労者、高齢者等のさまざまな年代での心身問題の予防と改善を日常生活の中でどのようにすすめることができるかという課題について、心身や環境のバリアの存在を注意深く捉え認識するとともに、またそうしたバリアの解消を目指すバリアフリーのあり方を視野に入れながら、検討していきたいと考えています。

■ 仁平典宏（にへい のりひろ）

【所属】

比較教育社会学コース・准教授

【専門分野】

社会学

【センターとの関わり】

2014年4月より運営委員として参加しています。専門は社会学で、日本型の生活保障や市民社会が生み出す社会的排除の諸相を研究しています。

社会には、失業や病気など様々なリスクがありますが、社会的に脆弱な層でその問題が深刻化する傾向があります。東日本大震災でも、障がいを持った方の被害や困難が大きかったことが指摘されていますが、それは平時の社会環境や関係性に埋め込まれたバリアが、災害時に増幅して現れたためです。

社会は平均＝正常（normal）とする規範（norm）を有し、平均領域を主な包摂対象とします。平均からの距離が大きいとされる時（障がい者、妊産婦、高齢者、貧困者など）、そんな社会環境自体が様々なレベルの障害／バリアとして立ち現れます。つまり「障害」とは本来社会の側に帰属しますが、それが個人に投射されて「障がい者」という形象が構築されるのです。

障害／バリアを問うことは「社会」自体を問うことであり、誰もがアクセスできる社会を創る営みと接続していると考えます。